

## 万人の探求

私たちが誰であろうと、何を信じていようと、共通していることが一つあります。それは、赦免、すなわち罪からの解放を願う気持ちです。私たちは皆、罪からの解放を得るために、誰か、または何かにすがります。ネパールのヒンズー教の祭りダサインでは、ヒンズー教の神々の怒りを宥めるために、参加者が何万頭もの動物のいけにえをささげます。仏教徒は厳格な自制により、「涅槃」という究極の靈的境地にたどり着こうとします。イスラム教徒は、独自の規律で決められた働きをすることによって、罪からの解放を得ようとしています。

Patheos というオンラインの宗教に関するサイトで、私はある無神論者の手紙を見つけました。「世俗の懺悔」というペンネームの筆者は、以前はカトリック信者でした。彼は罪悪感の扱いについて、別の無神論者の専門家に質問していました。

質問者：「以前、ある人を傷つけてしまったと思うんですが、悪かったと思った頃には、時すでに遅し。その人と連絡が取れない状況で、謝罪する方法がありません。前に進むために何をすればいいのかわかりません。神を信じない私は、どうやって罪悪感を取り除けばいいのでしょうか。このことを考えると、夜も眠れないことがあるんです。」

専門家：「相手に連絡が取れないということですから、空に向かい、その人を思いながら、自分の中でその人をまだ大事に思うところに気持ちを向けて、謝罪してください。そして、次のステップは償いです。壊れたものをなおす、傷を癒す、失ったものを取り戻すということですが、これも直接は出来ないで、間接的な償いをしましょう。それは、同じような過ちを決して繰り返さないように努めることです。

(無神論者でも、罪滅ぼしのために道徳的努力をしなければならないことに注目してください。)

さらに、赦しについては、専門家の回答を要約すると、自分自身を赦しなさいということでした。

誰でも人は、罪からの解放を求めています。私たち皆が抱えている罪から完全に解放される場所は、たった一つしかありません。それは、究極の大祭司です。

旧約では、大祭司と定められた人が、いけにえを献げました。それは、人々の罪の責任を取り扱い、贖い、罪深い人々を聖い神様に立ち返らせるためでした。しかし、イエス様が来られて初めて、すべての罪を覆う一度限りのいけにえがなされました。

今朝も、ヘブル人への手紙の続きを見て行きます。ヘブル人は、贖いを求めてイエス様を信じたのですが、旧約の儀式に戻る誘惑に駆られていました。彼らが抱える罪と罪悪感を、イエス様が果たして全て取り扱うことができるのかと疑問を抱き始めたのです。彼らは、なぜイエス様が彼らを罪から解放することのできる唯一のお方であるか、確信を与えられる必要がありました。今の私たちとあまり変わりません。

そして、私たちには、罪からの解放の確信も必要です。過去そして現在の罪から来る罪悪感に押しつぶされそうになります。私たちが負う必要のない重荷を負い続けている顕著な理由は、イエス・キリストが私たちを罪から解放するのに十分なお方であられることを忘れてたり、疑ったりするからです。そのような疑いによって、ヘブル人への手紙の著者は、イエス様が完全に私たちの罪の責任を負うことのできるお方であることを確信させてくれます。それは、イエス様が究極の大祭司、全能なる王であられるからです。

3章で著者は、イエス様の偉大さを示すために、イエス様をモーセと比較しました。また、旧約の大祭司の条件を取り上げ、特に、メルキゼデクと比べました。

先週は4章の最後の節で、私たちの大祭司であられるイエス様の御力とあわれみにより、「あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づ」くことができるという確信をいただいてメッセージを閉じました。今日の箇所では、良い大祭司の条件を見返すことで、キリストの偉大さをさらに拡大して私たちに見せてくれます。

### 良い大祭司の条件(1-4節)

- 神様に対する人々の罪の償いをする(1節)

**1節「大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。」**

著者は、大祭司の役目を定義することで、良い大祭司と完璧な大祭司の比較の土台を敷いています。一つ目の定義は、「選ばれ」、「任命され」ていること。これは、神様による召しです。これについては、4節で詳しく見ます。

大祭司の定義の二つ目は、人々のために神様に仕えることです。神様に対し、人々の代表となります。そして、罪を取り扱います。特に、罪の赦し、償いのために、ささげ物といけにえを献げます。

大義的に、罪のためのいけにえとしてささげ物をするのが大祭司の責任だったことがわかります。特に年に一度の贖罪の日はそうです。レビ記16章にあるように、最初の大祭司であったアロンは、至聖所に入り、罪のきよめのささげ物として雄牛と雄やぎを献げなければなりません。神様がそのようなささげ物を定められたのは、罪が汚れていること、そして罪の贖いには大きな犠牲がいることを示すためでした。そこにまず、私たちの主が、なんと恵みあふれるお方かということが表れています。

おそらく皆さんも誰かを傷つけてしまった経験があるでしょう。悪いと思って、償うために、花束を買ったとしましょう。それも、暑さでしおれてしまい8ドルで売られている花束ではなく、失礼のないように、もう少し値の張ったものを買って、その人に渡します。相手はあなたの贈り物を受け取り、全て赦し、仲直りしてくれます。これは、花束をあげた人よりも、受け取った人の好意です。

旧約の大祭司たちが、すでに神様のものであるささげ物を、神様に献げたという事実は、赦免し、恥を取り除き、和解を可能にする神様の恵みの証しです。

大祭司の第一の役割に加え、著者は良い大祭司の条件を続けて記しています。

- 祝福のための、弱さの自覚(2-3節)

**2節「大祭司は自分自身の弱さを身にまとっているのに、無知で迷っている人々に優しく接することができます。」**

仲介者としての大祭司の役割の定義の次に、良い大祭司の条件のトップに挙げられているのが、無知で迷っている人々に優しく接することです。この人々とは、言い換えれば、道徳的に道を外れた人々です。「優しく接する」と訳されている原語は、二方向の中間を捉えた言葉で、一方は無関心や極端な甘さ、もう一方は

極端な激高、苛立ち、残酷さです。では、どのようにバランスを保ったのでしょうか。この節の前半にそれが記されています。つまり、「大祭司は自分自身の弱さを身にまとって」だからです。自分自身の道徳的失敗を痛いほどわかっていたのです。

最初の大祭司であったアロンは、人々の罪に無関心になり、人々を扇動して黄金の子牛の偶像を作り、礼拝するという大きな失敗をしました。さらにアロンがモーセに言った言葉にも、罪への無関心さが表れています。「私は彼らに『だれでも金を持っている者は、それを取り外せ。』と言いました。彼らはそれを私に渡したので、私がこれを火に投げ入れたところ、この子牛が出て来たのです。」(出エジプト 32:24)

この時、罪に取り囲まれていたのはアロンでした。だから、モーセが人々の罪の贖いと赦しを求めなければなりません。良い大祭司の条件は、自分の弱さをいつも自覚していることです。そうすることで、謙虚な歩みができます。

余談ですが、これは、親、祖父母である私たちにもあてはまります。神様の優しさを持つとは、単純にそういうことなのです。他人の罪にあまりにイライラして、絶望的になってあきらめたり、ひどく怒って攻撃的になったりしたら、それこそが自分自身の罪を見失っているしるしです。

忘れてはいけません。私たちは、神様の聖なる相続者ですが、恵みによって救われた罪人でもあるのです。恵みにより、変えられ新しくされていますが、まだお互いに罪との葛藤があります。高慢になってはいけません。

これこそが、良い大祭司の一番の性質です。しかし、罪自体は決して良いものではありません。

**3 節 「また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。」**

レビ記 16 章には、贖罪の日の大祭司の役目が詳しく書かれています。まず、雄牛を献げ、その血を取って、『宥めの蓋』という契約の箱の周りに振りまかなければなりません。その『宥めの蓋』の上に、主が雲の中にお現れになりました。人々の罪のきよめのささげ物のやぎを献げ、『宥めの蓋』の周りにその血を振りまく前に、大祭司は、まず自分の罪を取り扱うことが絶対に必要でした。大祭司は、へりくだって自分の弱さを自覚し、優しく揺るがない態度で人々に接することで、祝福をもたらしました。そして、この優しさは、神様の召しによるものです。

• 確信を得るために、神様に与えられる栄誉(4 節)

**4 節 「また、この栄誉は自分で得るのではなく、アロンがそうであったように、神に召されて受けるのです。」**

出エジプト記 28 章にあるように、神様は、兄弟モーセを通して、アロンを大祭司として仕えるように召されました。アロンの装束の作成について、神様は一章も割いて指示されました。主が、アロンの大祭司の召しにどれほどの栄誉を備えておられたかが、ここに表れています。

ヘブル人にとって、「神に召される」という表現は、墮落した大祭司の長い歴史を思い出させるものだったでしょう。彼らは巧みにの上がり、エルサレムで大祭司の地位を得ました。その最たる者がカヤパです。

彼は、イエス様の死について咎められるべきであり、彼の恥ずべき後継者たちはエルサレムの陥落を招きました。

また、これはカトリックの司祭職にも及ぶことです。ローマ法王は今でも、「普遍的教会の最高位の教皇」という肩書があります。教皇はラテン語で pontifex で「橋を作る人、仲介人」という意味です。文字通り、最高位の仲介人、つまり大祭司です。しかし、この書簡のポイントは、大祭司の役割は主イエス・キリストによって全うされ、決して繰り返されてはならないということです。イエス様以外の誰かが、罪を赦す力と権威を持っていると言い張ることは、間違っているだけでなく、神様への冒瀆です。

アリストテア・ベッグ師はこう言っています。「これはプロテスタントの基礎となる教えです。しかし、これを提議するのは、今の時代、過激に聞こえるでしょう。概して教会は、恐ろしいほどに無知です。許容が王座に着いていて、真理は地に落ちています。言い換えれば、多くの場面で、許容が真理よりも優先されているのです。私たちは、何が正しく、何が間違っているかを知らなければなりません。さもなければ、多くの人々のように今日の混乱に押し流されてしまうでしょう。」

ヘブル人への手紙の著者は、ここで良い大祭司の条件を明確にし、過去の例を挙げて、次の対比をしています。

### 完全な大祭司の条件(5-10 節)

#### ・ 神様からの究極の称号により榮譽を得る(5-6 節)

**5 節**「同様にキリストも、大祭司となる榮譽を自分で得たのではなく、『あなたはわたしの子。わたしが今日、あなたを生んだ』と語りかけた方が、それをお与えになったのです。」

詩篇 2:7 救い主、王。ダビデの家系に救い主の王が王座に着かれる時に用いられる、即位の詩篇。神の御子。サムエル第二 7:14 「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。」の成就。

ヘブル人への手紙の著者は、すでに 1 章 5 節でイエス様が永遠の御子であられることについて、旧約聖書から 2 か所を引用していますが、ここで再び、イエス様が、よみがえりと昇天での栄光の中で、父なる神様の右の座に着かれたことを述べています。神様の栄光のために、神様から与えられる究極の称号、それに加えて、祭司という背景も与えられました。

**6 節**「別の箇所でも、『あなたは、メルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である』と言っておられるとおりです。」

詩篇 110 篇 ダビデによるこの詩篇の 4 節で、主は、ダビデの主への会話の中で「あなたは…とこしえに祭司である。」と言われました。

メルキゼデク「義の王」-詳しくはヘブル 7 章にあります。創世記 14 章にサレム(エルサレム)の王とあり、アブラムにパンとぶどう酒を与えて祝福し、アブラムは彼にすべての物の十分の一を与えました。聖書の記録からすると、メルキゼデクの時代はアロンの約 500 年前で、エルサレムの王が祭司となるという制度を築き、それは、後にキリストによって成就されました。

完全な大祭司の条件は、救い主なる王そして司祭という究極の称号を神様から与えられていることです。それ以前に任命された大祭司の称号よりも無限に優れており、そして苦しみにによって完成されました。

#### ・ 究極の弱さにより完成され、究極の祝福となられた (7-9 節)

7 節「キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもって祈りと願いをささげ、その敬虔のゆえに聞き入れられました。」

ゲツセマネの園の苦悩の場面を、マタイは、「イエスは彼らに言われた。『わたしは悲しみのあまり死ぬほどもです。』」と記録しています。そして、マタイ、マルコ、ルカは、イエス様が3度杯を過ぎ去らせてくださいと祈ったと記しています。「しかし、わたしが望むようにはなく、あなたが望まれるままに、なさってください。」

イエス様の祈りはどのように聞かれたのでしょうか。ルカによると、「御使いが天から現れて、イエスを力づけた。」とあります。御父のみこころが優先されるようにという祈りが聞かれました。

#### 8 節「キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみにによって従順を学び」

よみがえりの前のイエス様が、完全なお方ではなかったということではありません。むしろ、死に至る苦しみの試練の中で、イエス様の従順は無限に引き延ばされ、しかも崩れることはありませんでした。それゆえ、イエス様は完全な大祭司となられたのです。完全に優しく、あわれみ深く、それでいて罪を許容されません。御子が人となられたことは、苦しみを受けるために必要なことでした。御父は、御子に究極の試練をお与えになりました。イエス様の従順—その過去の事実が、私たちの現在と未来を造っています。それが、私たちの永久の大祭司なるお方です。

#### 9 節「完全な者とされ、ご自分に従うすべての人にとって永遠の救いの源となり」

「完全な者とされ」と訳されている動詞は、「完成された」という意味も持っています。つまり、神様の意図された苦しみ—イエス様の運命—に完全に従順であったイエス様の生涯は、イエス様が救いの確かな源となられるための必要を満たしました。イエス様は、罪のない代役として、ご自身のいのちを与えてくださったから、確かな救い主なのです。

#### ・ 究極の確信のために、神様から榮譽を受ける (10 節)

#### 10 節「メルキゼデクの例に倣い、神によって大祭司と呼ばれました。」

イエス様により罪が取り除かれたという神様の保証が与えられているのは、私たちが確信を得るためです。私たちのこの確信は、イエス様が御父に完全に従うことによって完成されます。イエス様は今も大祭司、つまり、私たちを御父のもとへ導いてくださるお方です。イエス様を主として従う全ての人にとって、イエス様こそが救いの源なのです。

「メルキゼデクの例に倣い」というのは、イエス様が究極の大祭司であられるだけでなく、すべてに打ち勝たれた私たちの永遠の王であられることを意味しています。

イエス様を信じるならば、あなたの罪が取り去られたことは保証されているのです！

イエス様は、何と素晴らしい友でしょうか！

牧師がある老人を訪ねました。椅子に座ったその人の向かいには、誰も座っていない椅子がありました。その人は、キリストに話すのが難しいと感じていました。そこで、偉大なるキリストが向かいに座り、全てわかってくださっていると想像して、空の椅子の前に座ったのです。

数週間後、その老人は亡くなりました。彼の娘に葬儀を頼まれた牧師は、彼の最期の姿を知って喜びました。老人は、空の椅子に腕を伸ばしていたそうです。それは、イエス様が必要な時にいつも助けてくださる友だと理解している人の姿です。イエス様は、王と祭司の完全な組み合わせです。

私たちは、罪の重みを自分で背負おうという誘惑に駆られます。その罪の重荷から解放してくださるのは、イエス様だけです。

今朝ここで、イエス様に頼るなら、イエス様は必ずそうしてくださいます。イエス様だけが私たちの大祭司、王だからです。